

パロディーとしての時代物

—*平家物語と文楽—

山 本 英 司

一 はじめに

文楽^一の楽しみ方にはいろいろある。何の予備知識もなく、太夫が何を語っているか聴き取れなくても、人形の動き・太夫の語り・三味線の音色に感動を覚えことも出来よう。幾度となく観た演目について、かつての舞台と比較しながら芸を堪能することも出来よう。あるいは、筋の展開を楽しむことも出来よう。特に文楽の場合、「その台本・脚本である浄瑠璃本は日本国中に伝播流通した、ほとんど唯一の近世文学書である」(神津二〇〇九、三頁)り、「浄瑠璃本は、読み物としても流通し」(同)ており、戯曲作品として鑑賞することもあながち邪道とは言い切れまい。

(1) 文楽作品は、時代物と世話物、そして景事に大きく分類される。時代物は「江戸時代以前の物語の世界に題材をとった浄瑠璃」(日本芸術文化振興会国立劇場調査養成部(編)二〇〇八、三三二頁)、世話物は「江戸時代の市井の事件を脚色したものの」(同)、そして景事は「一幕物の舞踊劇」(同、三三二頁)である。時代物の場合、全体の筋が分かる形での「通し」での上演は今日では稀で、多くは「見取り」と言われる複数作品の名場面集である。「かつてその作品を通して観たことがあり、あらずじは覚えている」というのが理想だが、そうでない場合、筋の展開を楽しむためには、公演プログラムなり、市販の解説書なり、浄瑠璃本または翻刻本なりを読んで、あらずじを把握する必要がある。しかしながら、これは筆者の個人的経験だが、あらずじを読んでもいったい何が面白

いのかよく分からず、それどころかあらずじ自体なかなか頭に入っていないことが少なくない。

これは、時代物に描かれている風俗習慣や価値観が現代人にとってなじみのないものであることや、例えば『義経千本桜』における「渡海屋銀平実^{とくみ}は平知盛^{とよもり}」といったように登場人物の人間関係が極めて複雑であることも一因であろう。筆者はこれらの要因に加えて、「時代物はパロディーであるが、現代人は元ネタを知らない」という仮説を提唱したい。

時代物は、先にも述べたように、「江戸時代以前の物語の世界に題材をとった浄瑠璃」である。しかもその登場人物は、例えば『義経千本桜』におけるいのみ権太のようにその作品で初めて登場する人物もいるが、多くの場合、歴史上の著名人である。したがって、江戸時代の観客にとって、時代物とはおなじみの登場人物が繰り返される物語にはかならない。しかし、いつも同じ物語ではさすがに飽きるので、変化を持たせる必要が出てくる。それが例えば「渡海屋銀平実^{とくみ}は平知盛^{とよもり}」である。この場合、平知盛がいかなる人物で歴史上いかなる役割を果たしたかは、言わば大前提である。それが分かっている観客に対して、渡海屋銀平の物語を展開し、そして彼が実は平知盛であると種明かしをする、それが江戸時代における時代物の作劇法であったのではなからうか。ところが、平知盛のことを知らない観客にとっては、「渡海屋銀平実^{とくみ}は平知盛^{とよもり}」と「種明かし」をされてもピンとこないのも無理はない。

いささか話が脱線するが、NHKの大河ドラマにも同様のことが言えよう。大河ドラマは戦国時代を舞台にするときに視聴率がいいと言われる。現代の日本人にとって、信長・秀吉・家康にまつわる物語は周知の事実である。であるからこそ、「新解釈」や「サイドストーリー」を楽しむことができる。しかしながら、なじみのない時代を舞台にされると、本来大前提であるべき人間関係すら消化不良のまま物語が進行していくことになる。平成二十四年（二〇一三）の大河ドラマ『平清盛』の低迷は、あるいはそれが一因かも知れない。

パロディーの元ネタという考え方は、特に歌舞伎について言われてきた「世界」とも関連する。「世界」は、単に作品の時代背景であるというに止まらず、(1)ごく基本的なストーリー、(2)登場する人物の役名、(3)それぞれの役の善悪強弱などの基本的な人格（すなわち役柄）、(4)人物相互の関係（対立葛藤・共調・恋愛など）などまでも含み込んだ概念（服部（編）一九七四、三頁）であるとされ、上方の狂言作者二世並木正三は『戯財録』の中で「堅筋は世界、横筋は趣向に成」と述べているという（同、四頁）。世界は元ネタ、趣向はパロディーに、それぞれ該当すると解釈することも可能であろう^二。

本稿では、元ネタとして特に『平家物語』に注目する。時代物としてしばしば取り上げられながら^三、現代人にはなじみが薄くなってしまっていると思われるからである。なお、『平家物語』には源平合戦期以外の義経のエピソードに乏しく弁慶のエピソードは皆無に近いのでそれを補うべく『義経記』にも注目し、さらに『平家物語』の前史として『平治物語』にも注目する^四。

文楽作品中のエピソードの出典として『平家物語』等に注目する研究は枚挙にいとまがなく、筆者はそれに付け加えるべき何物をも持たない。本稿がいささかなりとも独自性を有し得るとすれば、それは、「パロディーとしての時代物」を楽しむための観客の視点である。すなわち、『平家物語』等に親しんでいる者（江戸時代におけるよき観客）にとっては周知の元ネタを復習しつつ、そのパロディーとしての文楽作品の見どころの解説を試みるものである。

二 元ネタ

(1) はじめに

まず、「パロディー」としての文楽作品の「元ネタ」として、『平家物語』『義経記』『平治物語』について、それぞれ概要を記す。以上の作品における、文楽作品に題材を与えていると思われる事件及び重要な事件、並びに重要な史実について、末尾の年表にまとめたので、詳細はそちらを参照されたい。なお、史実については福田・関（編）（二〇〇六）（以下、『源平合戦事典』）及び高橋（二〇〇九）を主に参照した。

(2) 『平家物語』

『源平合戦事典』によると、成立は「一三世紀前半」（三四頁）であり、作者は「不明。最も有名なのは『徒然草』二二六段に記される「信濃前司行長」であり、この行長を藤原（中山）行隆の子行長のこととする説が一般的である」（同）。

問題は、「平家物語」には数多い諸本がある。相互の相違も非常に大きく、時にはほとんど別作品かと思われるような様相を呈しており、実際、「源平盛衰記」^{源平盛衰記}のように、『平家物語』とは名乗らない異本もある。しかしそれらは同時に、「平家物語」諸本」としか呼びびようのない共通性を抱えてもいる（同）ことである。「現在では、諸本を大きく読み本系と語り本系に分けるのが一般的である。一時は語り本系が本来の形と見られていたため、読み本系は「増補系」と呼ばれたこともあるが、現在ではむしろ、読み本系の方が本来の形に近いと考えられている」（二三五頁）。読み本系には延慶本・長門本・源平盛衰記・四部合戦状本・源平闘諍録があり、語り本系はおおまかに寛一本及び二方系諸本、八坂系諸本、その他に分けられ、寛一本が最も標準的な本文とされており、一方系諸本には葉子十行本・下村時房本・京師本・流布本などがあり、八坂系諸本には中院本・文禄本・国民文庫本などがあり、その他、屋代本・百二十句本・鎌倉本・平松家本・南都本などがあるという（二三五―二三六頁）。

伊藤（二〇一一）によると、「浄瑠璃の観客たる大衆は、平家物語諸本のうちでも特に流布本や『源平盛衰記』に何らかの形で接する機会が多かったと考えられることはできるのではなからうか」（十三頁）として、「本書では平家物語のテキストとして原則的に流布本と『源平盛衰記』を用いることとした」（同）としている。

本稿も右の方針を踏襲すべきであったが、筆者の力量不足から、『源平盛衰記』を実現することは断念せざるを得なかった。また、流布本は手元に用意したものの、現代語訳及び注釈の利用可能性を考慮し、流布本と覚一本とはそれほど大きな相違はないことから、東京大学国語研究所蔵の通称高野本（覚一別本）を底本とする市古（校注・訳）（一九九四a）及び（一九九四b）（以下、『平家物語①』及び『平家物語②』）を底本とした。大方の批判を甘受したい。

『平家物語』の内容を一言で言うと、周知の通り、平家の興隆から滅亡までの歴史を描いたものである。ただし、平家が権力を確立していく過程は全体の分量からすると極めて簡潔であり、平家に造反する鹿ヶ谷の謀議から物語は本格的に展開していく。ここで、『平家物語』の世界を仮に次のように時期区分することとしよう。

第一期。安元二年（一一七六）まで。保元の乱（保元元年（一一五六）七月）、平治の乱（平治元年（一一五九）十二月）、清盛の太政大臣就任（仁安二年（一一六七）二月十一日）と、清盛を筆頭として平家が権力を確立していく時期である。

第二期。安元三年（一一七七）から治承四年（一一八〇）四月二十二日頃まで。鹿ヶ谷の謀議発覚（安元三年（一一七七）五月二十九日）、安徳天皇誕生（治承二年（一一七八）十一月十二日）、重盛病死（治承三年（一一七九）八月一日）、後白河法皇の鳥羽殿幽閉（同年十一月二十日）、安徳天皇践祚（治承四年（一一八〇）二月二十一日）、安徳天皇即位（同年四月二十二日）と、平家への反発が表面化する中、平家が独裁体制を敷く時期である。

第三期。治承四年（一一八〇）四月二十八日頃から寿永二年（一一八三）七月二十五日頃まで。以仁王の令旨（治承四年（一一八〇）四月二十八日）、宇治合戦（同年五月二十三日）、福原遷都（同年六月二日）、頼朝拳兵（同年八月十七日）、石橋山の合戦（同年二十三日）、義仲拳兵（同年九月七日）、富士川の対陣（同年十月二十三日）、都帰り（同年十二月二日）、清盛病死（治承五年（一一八一）閏二月四日）、俱利伽羅峠の合戦（寿永二年（一一八三）五月十一日）、篠原合戦（同年二十一日）、平家都落ち（同年七月二十五日）と、源平の合戦が開始され、義仲に追われる平家がついに都落ちするまでの時期である。

第四期。寿永二年（一一八三）七月二十八日頃から寿永三年（一一八四）一月頃まで。義仲入京（寿永二年（一一八三）七月二十八日）、義仲に朝日の将軍の院宣（同年八月十日）、後鳥羽天皇践祚（同年二十日）、水島合戦（同年閏十一月一日）、法住寺合戦（同年十一月十九日）、宇治川の戦い（寿永三年（一一八四）一月二十日）、粟津合戦（同日）、樋口斬首（同年二十五日）と、義仲が都入りして朝日の将軍の院宣を受けるも、やがて後白河法皇と対立を深め、範頼・義経に敗れ、義仲主従が討死するまでの時期である。

第五期。寿永三年（一一八四）二月頃から元暦二年（一一八五）三月二十四日まで。一の谷の合戦（寿永三年（一一八四）二月七日）、維盛入水（同年三月二十八日）、後鳥羽天皇即位（寿永三年／元暦元年^五（一一八四）七月二十八日）、八島（屋島）の合戦（寿永四年／元暦二年（一一八五））、壇ノ浦の合戦（同年三月二十四日）と、主に義経の活躍について平家が滅亡するまでの時期である。

第六期。元暦二年（一一八五）三月二十五日以降。頼朝による義経の鎌倉入り拒否（元暦二年（一一八五）五月二十四日）、義経による腰越状（同年六月五日）、土佐坊による義経の夜討ち（文治元年（一一八五）九月三〇日）、義経の京都退出（同年十一月三日）と、梶原景時の讒言もあって頼朝が義経の追討を命じ、義経が逃避行を余儀なくされる時期である。

(3) 『義経記』

『源平合戦事典』によると、「著者未詳。八卷。通説は南北朝頃の成立とする。『判官物語』『義経双紙』『義経物語』などとも呼ばれ、これらの名称が物語るよ
うに、群雄の行動を軸に時代の変革を描く叙事詩としての軍記物語というより
は、源義経個人の数奇な生涯を描いた伝奇物語というべきもので、琵琶法師が
その語り物として語った」(二百九十四頁)。また、「語り物の常として異本が伝
わるが、諸本は、『判官物語』から流布本へと続く系列と、『判官物語』系に比
べてやや簡略な田中本をうけながら義経の北国落ちを詳しくし、在地の語りを
思わせるむごさと笑いの色を濃くする『義経物語』系との二系列に分かれる」
(二百九十五頁)。

本稿では、国立歴史民俗博物館所蔵の田中本を底本とする梶原(校注・訳)
(二〇〇〇)を底本とした(以下、単に『義経記』と記す場合はこの底本を指す)。
「一 はじめに」でも述べたように、『平家物語』には源平合戦期以外の義経
のエピソードに乏しく弁慶のエピソードは皆無に近い。逆に、『義経記』には源
平合戦期のエピソードが極端に少ない。底本における該当箇所を含む段落を左
に引用する。

かくて御曹司軍の手合はせに海道かいどうの軍に打ち勝つて、同じく寿永三年に
上洛して、平家を追ひ落とし、一の谷、八島、壇の浦、一途の忠を致し、
先を駆け身を碎き、終に平家を攻め亡ぼして、大將軍前内大臣宗盛父子生
け捕り、卅人具足して上洛し、院内いんないの見参に入りて、去んぬる元暦元年に
検非違使五位尉けんびわいしごいじゆうになり給ふ。大夫判官は、宗盛父子具足して、腰越こしえに着き
給ふ。(『義経記』百六十三頁)

これを境として、前半には、義経が平家追討に立ち上がるまでが描かれる。
具体的には、平治の乱の年(平治元年(一一五九))に義朝と常盤との子として

牛若うしわかが生まれたこと、常盤が清盛の妾になったこと、牛若が鞍馬寺に預けられ
たこと、出自を知り武芸の稽古に明け暮れたこと、遮那王しゃなわうと改名したこと、鞍
馬山を出て元服し左馬の九郎義経と改名したこと、鬼一法眼おにいちほうがんの邸に入り込んで
兵法奥義の「六韜」を入手したこと、などが描かれる。並行して弁慶について、
熊野の別当弁せうの妻の腹の中に十八か月いて生まれたこと六、鬼若おにわかと名付けら
れたこと、比叡山に預けられ、自ら剃髪して弁慶と改名して比叡山を下り
たこと、書写山で騒動を起こしたこと、太刀を千本集めようとしたこと、千本
目の太刀をめぐって義経と出会い、主従の契りを結んだこと七、などが描かれる。
後半には、平家を滅ぼした後、頼朝の不興を蒙った義経主従の逃避行が描か
れる。具体的には、義経が平時忠の娘を妻としたこと、鎌倉に赴くも腰越に留
め置かれて頼朝と対面できなかったこと、京に戻った後、頼朝の命を受けた土
佐坊正尊の夜討ちにあったこと、静を連れて都を出たこと、船で九州に行こう
として大物浦で暴風雨に逢い、いったん吉野に逃れたこと、佐藤忠信に身代わ
りとして姓名を与えたこと、などが描かれる。これらのエピソードは『平家物語』
と重複しつつ一部相違する。

(4) 『平治物語』

「(2) 『平家物語』」でも述べたように、保元の乱及び平治の乱を経て平家は
権力を確立していくのであるが、その経緯の『平家物語』における描写は極め
て簡潔である。保元の乱については『保元物語』、平治の乱については『平治物語』
があり、「平家物語」『承久記』とあわせ四部合戦状(四部之合戦書)とも称さ
れる」(『源平合戦事典』三百七頁)。

本稿では、『平治物語』も「パロディーの元ネタ」と見なし、柳瀬ほか(校注・
訳)(二〇〇二)所収の信太周・犬井善壽の校注・訳を底本とした(以下、単に『平
治物語』と記す場合はこの底本を指す)。

三 パロディー

(1) はじめに

伊藤(二〇一一) 末尾の「附録『平家物語』 関連浄瑠璃一覽」のうち、「文楽現行曲及び浄瑠璃史の観点から特に重要と考えられる作品」(三百五十五頁)としてゴシック体で記載されているものは、『出世景清』『烏帽子折(源氏烏帽子折)』『平家女護島』『大仏殿万代石楚』『三浦大助紅梅豹』『須磨都源平躑躅』『鬼一法眼三略卷』『壇浦兜軍記』『御所桜堀川夜討』『ひらかな盛衰記』『義経千本桜』『源平布引滝』『一谷嫩軍記』『祇園女御九重錦』『嬢景清八嶋日記』の十五作品である。これらのうち、本稿では、今日でも実際に上演され、かつ、翻刻書の利用が容易なものとして、『平家女護島』『鬼一法眼三略卷』『御所桜堀川夜討』『ひらかな盛衰記』『義経千本桜』『源平布引滝』『一谷嫩軍記』の七作品を対象とする。

以下、それぞれの対象作品について、概要及び「パロディーとしての見どころ」を記す。以上の作品における『平家物語』等に題材を得たと思われる事件について、『平家物語』等における事件と対応させつつ末尾の年表にまとめたので、詳細はそちらを参照されたい。

(2) 『平家女護島』

享保四年(一七一九) 八月十二日、竹本座初演。作者近松門左衛門。鳥越ほか(校注・訳)(二〇〇〇) 所収の阪口弘之の校注・訳を底本とした(以下、単に『平家女護島』と記す場合はこの底本を指す)。

底本の梗概によると、第一(六波羅清盛館の場／六条河原の場／六波羅清盛館の場)・第二(鳥羽の作り道の場／鬼界が島の場)・第三(重盛館の場／朱雀の御所の場)・第四(船路の道行／敷名の浦の場／清盛館の場)・第五(文覚仮寝の場)、という構成である。

独立行政法人日本芸術文化振興会が運営するウェブサイト「文化デジタルライブラリー」の「公演記録を調べる」(<http://www2.ntjac.go.jp/dglib/plays/>)

以下「公演記録」によると、本公演では、平成十五年(二〇〇三)十一月国立文楽劇場での「鬼界が島の段」が直近の公演である。平成七年(一九九五)二月国立劇場小劇場での「六波羅の段／鬼界が島の段／舟路の道行より敷名の浦の段」が、三段目を欠くが、半通しと言ってよい直近の公演である。

鹿ヶ谷の謀議の翌年(治承二年(一一七八))から、清盛の死(治承五年(一一八二)閏二月)の頃までを描く。時期区分で言うと第二期にあたる。

『平家女護島』におけるパロディーの眼目を一言で言うと、「俊寛は実は自分の意志で残った」というものである。平家打倒の鹿ヶ谷の謀議に関与した廉で俊寛僧都・平判官康頼・丹波少将成経の三人が鬼界が島に流されていたが、俊寛以外は赦されて都に戻る。このエピソードを元ネタとして、実は俊寛も赦されていたが、ある事情により自ら島に残ることを選んだ、というパロディーが二段目で描かれる。なお、近年では上演されないが四段目切において、俊寛の代わりに島を出ることとなった成経の妻千鳥及び俊寛の妻東屋の二人の幽霊が清盛を取り殺すというパロディーで物語はクライマックスを迎える。

また、平治の乱の翌年(永暦元年(一一六〇))、平家の家臣の弼兵衛宗清が幼い頼朝の助命に尽力し、一の谷の合戦の後の寿永三年／永暦元年(一一八四)五月、頼朝が宗清を懐かしんだといったエピソードを元ネタとして、実は宗清は源氏再興に力を貸していたといったパロディーが、近年では上演されないが、三段目で描かれる。それと同時に、夫義朝の死後、敵清盛の妾となっていた義経の母常盤が、実は意外な手段で源氏の再興を図っていたとのパロディーが描かれる。

『平家女護島』では文覚も活躍する。文覚は、平治の乱で敗れて晒し首となつた義朝の髑髏を貰い受けて肌身離さず持ち歩き、頼朝に決起を促した怪僧として有名である。この作品では、源平の攻防の象徴として、髑髏がいったん平家に奪われ、文覚がまた取り戻すといったパロディーが描かれる。また、五段目ではエピソードとして、平家追討の院宣を頼朝に届ける途中、髑髏を枕に仮寝

した文覚の夢の中で、その後の平家滅亡が描かれる。

(3) 『鬼一法眼三略巻』

享保十六年(一七三二)九月十二日、竹本座初演。作者文耕堂・長谷川千四。義太夫節正本刊行会(編)(二〇〇七)を底本とした(以下、単に『鬼一法眼三略巻』と記す場合はこの底本を指す)。

底本の梗概によると、第一(熊野浦・平家御座船/熊野・音なしの里・こんげん松/熊野・坂上文藤次住家)・第二(道行古郷ノ巡礼歌/播州・福井宿外れ乳母飛鳥住家/播州・書写山青松院)・第三(京・平清盛館/京・今出川鬼一法眼)・第四(京・檜垣茶屋/京・一条大蔵卿館)・第五(京・五条橋)、という構成である。公演記録によると、本公演では、平成二十三年(二〇二二)十月〜十一月国立文楽劇場での「鞍馬山の段/播州書写山の段/清盛館の段/菊畑の段/五条橋」が直近の公演であり、序段と四段目を欠くが、半通しと言ってよい。

平治の乱(平治元年(一一五九)十二月)から、牛若が弁慶と主従の契りを結ぶ(安元三年(一一七七)?)までを描く。時期区分で言うと第一期にあたる。『鬼一法眼三略巻』におけるパロディーの眼目を一言で言うと、「鞍馬山で義経(牛若丸)に兵法を指南した天狗は実は鬼一法眼であった」というものである。鞍馬山で天狗が義経(牛若丸)に兵法を指南したという伝承は、『平家物語』にも『義経記』にも見られないが、江戸時代の観客にとって一般常識に属していたことであろう。それとは別に、『義経記』には、義経が平家に仕える鬼一法眼の邸に入り込んで兵法奥義の「六韜」を入手したエピソードが描かれている。これら二つのエピソードを元ネタとして、両者は実は同一人物であり、平家に仕えながら源氏に心を寄せる鬼一法眼の苦肉の策が天狗に化けての義経(牛若丸)への兵法指南であり、かつまた、六韜三略の「虎の巻」を直接義経(牛若丸)に渡すわけにはいかないと、ある工夫によって義経(虎蔵)に渡るようにする、というパロディーが三段目で描かれる。今日上演される「鞍馬山の段」

は実は原作には存在しないが、パロディーの元ネタとなるべきエピソードを補充して上演する工夫と言えよう。なお、鬼一法眼には鬼次郎、鬼三太という弟がおり、鬼次郎は弁慶の姉お京の夫であり、鬼三太(智恵内)は義経(虎蔵実(牛若丸))の家来であるとのパロディーも描かれる。

文楽では近年全く上演されないが、歌舞伎では『一条大蔵譚』としてしばしば上演される四段目は、義経の母常盤に関するパロディーである。先にも述べたように常盤は清盛の妾となるが、さらにその後、大蔵卿藤原長成に下げ渡されて後妻となる。このエピソードは『平家物語』『義経記』『平治物語』いずれにも見当たらないが^{一〇}、史実であり、何らかの形で江戸時代の観客にも知られていたであろう。この常盤と大蔵卿が、表向きは平家に服従する姿勢を見せながら^{一一}、実は源氏再興への思いを抱いていた、というパロディーが四段目で描かれる。三段目の鬼一法眼と合わせ、平家への面従腹背を描くところが、『鬼一法眼三略巻』全体を貫くテーマと言えよう。

なお、『義経記』では弁慶が太刀を千本集めようとしていたところ、『鬼一法眼三略巻』五段目では義経(牛若丸)が家来を集めるために千人切りをしたというパロディーが描かれ^{一二}、主従の契りを結んで大団円となる。

(4) 『御所桜堀川夜討』

元文二年(一七三七)一月二十八日、竹本座初演。作者文耕堂三好松洛。宮本(校訂代表)(一九九五)所収の黒石陽子の校訂を底本とした(以下、単に『御所桜堀川夜討』と記す場合はこの底本を指す)。

底本の場割によると、第一(大序 鎌倉問注所/中 石部宿本陣/切口 堀川御所下馬先/切 堀川御所内)・第二(口 五条橋橋詰/中 粟田口/切 伊勢三郎住家)・第三(口 堀川御所/切 侍従太郎館)・第四(道行 道行伊勢みやげ/中 草津宿/切 堀川御所)・第五(口 堀川御所前/花扇郡郡枕)、という構成である。

公演記録によると、本公演では、平成十九年（二〇〇七）一月国立文楽劇場での「弁慶上使の段」が直近の公演であり、これ以外の場の公演記録は見当たらない^{一三〇}。

義経が平時忠の娘を妻に迎えてから（元暦二年（一一八五）五月？）、土佐坊による義経の夜討ち（文治元年（一一八五）十月^{一四}）までを描く。時期区分で言うと第六期にあたる。

『御所桜堀川夜討』の近年唯一上演される三段目切におけるパロディーの眼目を一言で言うと、「弁慶には実は娘がいた」というものである。これは、「弁慶が生涯に一度女犯したという当時知られていた俗説を趣向とし」（宮本（校訂代表）一九九五、四百四十九頁）たもので、『平家物語』『義経記』には弁慶の娘や交際相手の存否について何ら触れるところがないが、『平家物語』『義経記』に描写される平時忠の娘をめぐるエピソードに弁慶の娘を絡ませたところに趣向がある。

時忠は清盛の妻時子の弟であり、「此一門にあらざらむ人は、皆人非人なるべし」（『平家物語』①二十九頁）と豪語した人物である。平家が滅亡したと言われる壇ノ浦の合戦（寿永四年／元暦二年（一一八五）三月二十四日）の際には生け捕られ、三種の神器の一つである内侍所（八咫鏡）の扱いについて源氏の武將に注意を促している。また、都に護送されてから、頼朝に見られてはならない手紙を取り戻すために娘（名前は知られない）を義経に嫁がせたところ、義経は手紙の入れ物の封も解かず返却し、中身は何であったかと世間が噂をし、この話を聞いて頼朝は義経に不審を抱いた、などと『平家物語』にはある。以上のエピソードを元ネタとして、時忠の娘に卿の君という名前を与え、義経に対して卿の君の首を差し出せとの頼朝の命令が梶原平次景高（平三景時の次男）を通じて伝えられたところ、弁慶が娘信夫を身代わりに殺すというパロディーが三段目切で描かれる。

なお、近年では上演されないが、前記の場面に先立つ三段目口では、景高は

「北の方卿の君の首討つて。回文に相添渡されよとの御詫意なり」（三百七十一頁）^{一五}と要求している。ここで回文とは、元ネタにおける義経の手元にあった内容不明の手紙に相当する。それは平家の連判状であり、実はそれには梶原親子の名前も記されていた、すなわち頼朝に対して義経を讒訴したはずの梶原が実は平家方に通じていたというパロディーが描かれる。

また、近年では三段目切しか上演されないでその予備知識としてはあまり役に立たないが、『御所桜堀川夜討』全体を通してのパロディーの眼目は実は、「土佐坊昌俊は実は義経を守るために行動しており、夜討ちを行った正尊は実は梶原の家来の番場の忠太である」というものである。これはどういうことかと言うと、義経の館に夜討ちを行った土佐坊について、『平家物語』では昌俊と記し、『義経記』では正尊と記しているところ^{一六}、同一人物について様々な伝承があると解釈するのが普通であるが、実は昌俊と正尊とは別人であったというパロディーが描かれる。『御所桜堀川夜討』を大序から通して観ると、昌俊は終始一貫して義経を守るために行動していることが分かる。そこで観客が、「おかしいな、昌俊は義経を夜討ちした下手人なのに」と不審に思っていると、四段目切で、梶原の家来の番場の忠太が昌俊の名を騙って夜討ちを仕掛け、五段目で、昌俊の名を騙った番場の忠太に弁慶が正尊と名付けて首を打ち、だから後世に昌俊と正尊の二つの名前が伝わったのだと種明かしがなされる、というパロディーが描かれるのである。

その他、「九郎判官いまだ牛若たりし時。五条の橋の千人切と。世の取沙汰も早十三年」（三百四十八頁）、味方を求めてのかつての義経の行いの被害者・遺族に対し、慰謝料が支払われるといったパロディーが二段目口で描かれ、それと関連して、かつて伊勢の三郎義盛（後に義経の家臣となる）の父を平家の家来と間違えて斬ってしまった昌俊が責任を取って義盛に討たれることを二段目切で約束し、四段目切で番場の忠太の贖昌俊による夜討ちの後、実際に討たれる、といったパロディーも描かれる。

(5) 『ひらかな盛衰記』

元文四年（一七三九）一七四月十一日、竹本座初演。作者文耕堂・三好松洛・浅田可啓・竹田小出雲・千前軒。祐田善雄「竹田出雲の襲名と作品」（国立劇場芸能調査室（編）（一九八六）に再録）によれば、竹田小出雲は二代目出雲であり、千前軒は元祖出雲である。乙葉（校注）所収を底本とした（以下、単に『ひらかな盛衰記』と記す場合はこの底本を指す）。

国立劇場芸能調査室（編）（一九八六）所収の梗概によると、初段（大序 射手明神の段／中 義仲館の段／切 粟津の段）・第二段（口 桂の里楊子屋の段／中 梶原館の段／切 先陣問答より源太勘当の段）・第三（道行君後紐／口 大津宿屋の段／中 笹引きの段／切 松右衛門内より逆槽の段）・第四（口 辻法印の段／中 神崎揚屋の段／切 景季出陣の段）・第五（生田の森の段）、という構成である。

公演記録によると、本公演では、平成二十三年（二〇一一）九月国立劇場小劇場での「大津宿屋の段／笹引きの段／松右衛門内より逆槽の段」が直近の公演である。昭和六十三年（一九八八）十一月国立文楽劇場での「射手明神の段／義仲館の段／楊子屋の段／大津宿屋の段／笹引きの段／松右衛門内の段／逆槽の段／梶原館の段／先陣問答の段／源太勘当の段／辻法印の段／神崎揚屋の段／奥座敷の段」が、順序を入れ替えてはいるが、通しと言ってよい直近の公演である。昭和五十四年（一九七九）二月国立劇場小劇場では、前記の「大津宿屋の段」の前に「道行君後紐」を加え、「辻法印の段」を省いている。

宇治川の戦い（寿永三年（一一八四）一月二十日）から、一の谷の合戦（同年二月七日）までを描く。時期区分で言うと第四期から第五期にあたる。

『ひらかな盛衰記』におけるパロディーの眼目を一言で言うと、「義仲には実は駒若という子がおり、樋口次郎兼光は実は一の谷の合戦まで生きていた」というものである。頼朝・義経の従兄弟にあたる義仲は、平家都落ちの後、源氏方として初めて入京し、朝日の将軍の院宣を受けたものの、やがて後白河法皇

と対立し、それは法住寺合戦で決定的なものとなる。頼朝は異母弟の範頼・義経を義仲追討に向かわせ、宇治川の戦いで敗れた義仲は召使山吹を都に残すが巴をいったん連れて逃げ、やがて巴と別れた後、粟津合戦で討たれる。その後、義仲の家臣で四天王の一人と言われた樋口次郎兼光も捕えられ、斬られる。範頼・義経は引き続き平家追討に向かい、一の谷の合戦で勝利する。以上のエピソードを元ネタとして、義仲と山吹御前との間に実は駒若という長男がいて逃避行を続けており、樋口は実は義仲の討死の後も潜伏して仇討の機会を伺っており、両者が偶然にも合流する、といったパロディーが三段目で描かれる。また、『平家物語』では、八島（屋島）の合戦の船戦を前に逆槽という操法の採用をめぐって義経と梶原景時との間で論争が行われるが、この有名なエピソードを元ネタとして、逆槽について景時に教えたのは実は樋口であったというパロディーも加わる。

こういったパロディーを補強するものとして、義仲が朝敵謀反人となったのは、平家を油断させて、後白河法皇の命に従い三種の神器を取り戻すための計略であったという設定が序中で描かれる。これは、平家が都落ちの際に三種の神器を持ち去っており、義仲入京後、後白河法皇が安徳天皇と三種の神器を都に返すよう西国へ院宣を下すも、平家が従わなかったことを元ネタとするパロディーである。この設定があればこそ、朝敵とされた義仲の遣児駒若や遣臣樋口の立場が正当化されるのであるが、三段目だけの上演においてはあまり意識されていないように思われる^{一八}。

三段目と比べて上演頻度は低いですが、二段目・四段目では、宇治川の先陣争いや梶原家をめぐるパロディーが描かれる。先に述べた宇治川の戦いについて、佐々木四郎高綱が梶原源太景季との先陣争いで勝利した有名なエピソードを元ネタとして、実はある事情により景季が勝利を譲ったのだとするパロディーが二段目切で描かれる。しかし、先陣争いに敗れたことをもって景季は父景時より切腹を命じられ、母延寿によって「ヤアどこへ腹とはそりやならぬ。恥かしい

た人でなし大小もいであほう私ひ。手ぬるい父御の指図より。きびしい母の仕置を見しよ」(『ひらかな盛衰記』百三十七〜百三十八頁)との名目で助命のため勘当される。その景季が、一の谷の合戦の前日、名譽挽回のため合戦に参加しようとして、周囲が苦勞するのが四段目である。

駒若と景季を結び付け、物語に統一性を与える鍵となるのが鎌田隼人清次という人物である。『平治物語』には、平治二年(一一六〇)一月三日、義朝とともに討たれた臣下として鎌田兵衛正清の名が見える。これを元ネタとして、鎌田兵衛政清には実は鎌田隼人清次という弟がおり、兄から勘当を受けていたが、源氏に帰参するため、長女お筆を義朝の甥義仲に、次女千鳥を義朝の長男頼朝の家臣梶原に、それぞれ奉公させていたというパロディーが描かれる。お筆は義仲の遺児駒若を連れて逃げるが、途中ではぐれてしまい、父も討たれる。千鳥は梶原家の長男源太景季と恋仲である。紆余曲折あつて、お筆と千鳥は父の敵を討ち、駒若は義経に託されて大団円となる。

(6) 『義経千本桜』

延享四年(一七四七)十一月十六日、竹本座初演。作者竹田出雲・三好松洛・並木千柳。この出雲は二代目であり、並木千柳は豊竹座の並木宗輔の竹本座における名称である。角田・内山(校注)(一九九二)所収を底本とした(以下、単に『義経千本桜』と記す場合はこの底本を指す)。

国立劇場芸能調査室(編)(一九八六)所収の梗概によると、初段(大序 仙洞御所の段/中 北嵯峨庵室の段/切 堀川御所の段)・二段目(口 伏見稲荷森の段/中 渡海屋の段/切 大物浦の段)・三段目(口 吉野下市茶店権木の段/中 小金吾討死の段/切 すしやの段)・四段目(道行初音の旅/奥 吉野の里の段/口 吉野蔵王堂の段/中 川連館の段/切)・五段目(吉野山中の段)、という構成である。

公演記録によると、本公演では、平成十六年(二〇〇四)四月国立文楽劇場

での「仙洞御所の段/堀川御所の段/伏見稲荷の段/渡海屋・大物浦の段/権木の段/小金吾討死の段/すしやの段/道行初音旅/河連法眼館の段」が直近の公演であり、通しと言ってよい。平成十五年(二〇〇三)九月国立劇場小劇場では、前記の「仙洞御所の段」の次に「北嵯峨の段」を加えている。昭和五十六年(一九八一)五月国立劇場小劇場では、さらに「河連法眼館の段」の次に「河連法眼館奥庭の段」を加えており、近年では最も完全な形での通しである。

平家滅亡後、義経がいったん鎌倉に上るも頼朝と対面がかなわず京に戻ってから(元暦二年(一一八五)六月頃)、吉野に逃れた義経が衆徒に襲われる(文治元年(一一八五)十二月^一)までを描く。時期区分で言うと第六期にあたる。

『義経千本桜』におけるパロディーの眼目を一言で言うと、「死んだはずの平家方の武将や安徳天皇は実は生きていた」というものである。一の谷の合戦で平家が敗れた後、清盛の嫡子重盛の嫡子維盛^{二〇}は戦線を離脱して高野山に上って出家し、熊野を参詣後、那智の沖で入水する。また、八鳥(屋島)の合戦に続いての壇ノ浦の合戦で平家は滅亡するが、その際、二位の尼時子が孫の安徳天皇を抱いて入水し、清盛の甥教経、清盛の四男知盛^{二一}も入水する。以上のエピソードを元ネタとして、知盛は大物浦の渡海屋銀平として、安徳天皇はその娘お安として(二段目)、維盛は吉野下市村の釣瓶鮪^{二二}の養子弥助として(三段目)、教経は横川の禪師覚範として(四段目)、それぞれ生きているといったパロディーが描かれる。なお、安徳天皇は実は女であったというパロディーも描かれるが、『平家物語』自身に実は女ではないかと匂わせるエピソードが描かれており^{二二}、「実は」と言うより「やはり」と言うべきかも知れない。

初音の鼓と静と佐藤四郎兵衛忠信に関するパロディーも重要である。『義経記』によると、吉野山中に逃れた義経は足手まといとなる静と別れる際、後白河院から賜った初音の鼓を与えている。さらに義経が吉野から逃れる際、忠信はしんがりとして残って戦うと申し出て、義経より太刀と清和源氏の御号と鎧と兜

を賜り、義経の身代わりとして川つらの法眼や横川の禪師覚範ら吉野の衆徒と戦っている。以上のエピソードを元ネタとして、初音の鼓を賜ったことが義経が頼朝の不審を蒙る一因となり、京を立ち退く際に静に初音の鼓を与えて別れ、静を預けた忠信は実は狐であり、狐は初音の鼓と深い因縁がある、といったパロディーが描かれる。

その他、「(4)『御所桜堀川夜討』」でも触れた時忠の娘(『義経千本桜』でも卿の君という名前が与えられている)や土佐坊の夜討ちについても独自のパロディーが初段で演じられる。

(7)『源平布引滝』

寛延二年(一七四九)十一月二十八日、竹本座初演。作者並木千柳・三好松洛。鶴見(校注)(一九五九)所収を底本とした(以下、単に『源平布引滝』と記す場合はこの底本を指す)。

国立劇場芸能調査室(編)(二九八八)所収の梗概によると、初段(大序 大内の段/中 布引の瀧の段/切 西八條清盛館の段)・二段(口 粟津親子地藏茶店の段/中/切 白河木曾義賢館の段)・三段(道行形見の寄生/口 矢橋の段/中 竹生島遊覧の段/切 九郎助住家の段)・四段(口 鳥羽大路の段/切 鳥羽の離宮の段)・五段(木曾山中の段)、という構成である。

公演記録によると、本公演では、平成二十三年(二〇一一)五月国立劇場小劇場での「矢橋の段/竹生島遊覧の段/糸つむぎの段/瀬尾十郎詮議の段/実盛物語の段」が直近の公演である。平成二十年(二〇〇八)十二月国立劇場小劇場での「義賢館の段/矢橋の段/竹生島遊覧の段/九郎助内の段」が、初段と四段目を欠くが、半通しと言ってよい直近の公演である。平成十九年十一月国立文楽劇場での「音羽山の段/松波琵琶の段/紅葉山の段」は四段目の改作である。昭和四十五年十一月国立劇場小劇場での「大内の段/布引滝の段/義賢館の段/矢橋の段/竹生島遊覧の段/九郎助内の段/音羽山の段/松波

琵琶の段/紅葉山の段」が、四段目が改作であるが、通しと言ってよい直近の公演である。

平治の乱(平治元年(一一五九)十二月)が治まってから、承安の初め頃(嘉応二年(一一七二)四月二十一日に承安に改元)までを描く。時期区分で言う第一期にあたる。

そもそも第一期について、『平家物語』では簡潔な描写しか見られず、特に義仲の出生や義仲の父義賢の死の経緯についてはほとんど記されていないところ、『源平布引滝』はその「空白」を埋め、義賢の死及び義仲の出生にまつわる「詳細」を描くものである。『平家物語』では、義賢について、「久寿二年八月十六日、鎌倉の悪源太義平が為に誅せらる」(『平家物語②』四四二頁)とあるのみであるが、この予備知識はむしろ不要であろう。と言うのも、『源平布引滝』においては、義賢が討たれたのは平治の乱の翌年、平家方によってであると二段目切で描かれるが、「久寿二年(一一五二)に義賢は死んでおらず、実は平治二年または永暦元年(一一六〇)まで生き延びていた」とか「義賢を襲ったのは義朝の長男義平ではなく、実は平家方であった」などとして鑑賞するのは的外れと言わざるを得ないからである。

『源平布引滝』は『平家物語』の世界の第一期にあたる時期を描くものであるが、実は第二期以降の時期を含め『平家物語』『源平盛衰記』等から大量のエピソードが利用されている^{二三}。例えば、初段では長田親子による義朝の首献上と恩賞の見込み違い(平治二年(一一六〇)一月)^{二四}、難波の布引の滝入り^{二五}、鹿ヶ谷の謀議発覚後の藤原成親^{二六}らの捕縛と西光法師の殺害、重盛による成親の助命、後白河法皇幽閉を阻止するための重盛による清盛への示威行動(安元三年(一一七七)六月一日)が利用され、三段目では経正(清盛の異母弟経盛の長男)の竹生島詣(寿永二年(一一八三)四月十八日)が利用され、四段目では後白河法皇の鳥羽離宮幽閉、待宵の小侍従と物かはの藏人との歌のやりとり(治承四年(一一八〇)八月十日過ぎ)、成親の備前児島への流罪(安元三年

(一一七七) 六月三日) が利用され、五段目では重盛の死にまつわるエピソードが利用される。しかしながら、これらのエピソードは第二期以降の時期からも利用されていることに見られるように、時系列がバラバラであり、「あのエピソードをこう料理したか」などと換骨奪胎の妙を楽しむことは可能であっても(これもパロディーではあるが)、『源平布引滝』の「筋」を理解するために必要不可欠な予備知識とは言い難い。

その他、義仲が栗津の深田にはまって討たれること(二段目中)、幼い義仲が信州の権の頭兼任二七に預けられること(三段目切)、篠原合戦で実盛が手塚の太郎に討たれること(同)等、『平家物語』に見られるエピソードがほぼそのままの内容で、しかし「未来の予言または予定」という形で語られたりもするが、これらなどはむしろ、『平家物語』の内容を知らない観客に対して、予備知識を与えるものと解釈することすら可能であろう二八。

強いて言うならば、「多田の蔵人行綱は実は源氏の忠臣であった」というのが『源平布引滝』におけるパロディーの眼目であろう。『平家物語』において行綱は、鹿ヶ谷の陰謀を清盛に密告した裏切り者として描かれる。行綱のその後は『平家物語』には描かれていないが、頼政が仁王に平家追討の令旨を迫る際、頼みとなるべき源氏は全国に大勢いると列挙していく中で、「撰津国には、多田蔵人行綱こそ候へども、新大納言成親卿の謀反の時、同心しながらかへり忠したる不当人で候へば、申すに及ばず」(『平家物語』①二百七十八～二百七十九頁)とまで名指しされている二九。

その行綱が実は(あるいはかつては)、後白河院に期待を掛けられ(大序)、失敗したものの秘かに重盛を狙い(序中)、真意を窺うために奴折平として義賢館に潜入し(二段目)、義賢から娘待宵姫三〇を託され(二段目切)、妻小まん・息子太郎吉・小まんの父(実は養父)九郎助もそれぞれ忠義を尽くし(三段目)、清盛によって幽閉されていた後白河院を救出しようとする鳥羽の離宮に仕丁の藤作として潜入する(四段目)など、ほぼ全段にわたって源氏の忠臣の代表として

描かれている。また、行綱の息子太郎吉は、手塚の太郎光盛として義仲の最初の家臣となる(三段目切)三二。

とは言え、元ネタを知らない観客が、「実は」ではなくそもそも行綱は源氏の忠臣であったと誤解して『源平布引滝』を鑑賞しても十分筋は通る。同様に、「平家方の実盛は実は源氏に心を寄せていた」というパロディーにしても、そもそも実盛は平家に仕えながら源氏に心を寄せていたキャラクターであったと観客が誤解しても筋は通る三三。また、『平家物語』における瀬尾太郎兼康を元ネタとする、「平家方の敵役瀬尾の十郎兼氏は実は義仲の家臣手塚の太郎光盛の祖父であり、孫に手柄を立てさせるため自ら討たれる」というくだりだけはパロディーらしいパロディーであるが、これが『源平布引滝』の眼目であると言うのは躊躇を覚える。

『平家物語』等から多数のエピソードを利用しながらそれらの予備知識が、換骨奪胎の妙などは別として、筋の理解にほとんど不必要であるという意味において、『源平布引滝』はパロディーとしてはかなり特異な例と言えよう。

(8) 「一谷嫩軍記」

宝暦元年(一七五二)十二月十一日、豊竹座初演。作者浅田一鳥・浪岡鯨児・並木正三・難波三蔵・豊竹甚六・並木宗輔。「宗輔が本曲の三段目までを作って死んだので四段目以下を浅田一鳥等が追加して五段に纏めたものであると伝えられる」(国立劇場芸能調査室一九八八、四百九十八頁)。祐田(校注)(一九六五)を底本としたが(以下、単に『一谷嫩軍記』と記す場合はこの底本を指す)、本文として収録されているのは三段目切の「熊谷陣屋の段」だけで、しかも正本ではなく床本を底本としており、補注においてそれ以外の場の断片が収録されているに過ぎない。本来であれば浄瑠璃本または戦前の翻刻書を底本とすべきであるが、筆者の力量不足から、前記及び国立劇場芸能調査室(編)(一九八八)所収の梗概によって内容を把握した。大方の批判を甘受したい。

前記梗概によると、初段（大序 堀川御所の段／中 北野天満宮境内の段／切 一の谷経盛飯館の段）・二段目（口 陣門の段／中 須磨浦組討の段／切 林住家の段）・三段目（口 弥陀六内の段／中 脇ヶ浜宝引の段／切 熊谷陣屋の段）・四段目（道行花の追風／跡 鶴ヶ丘八幡社頭の段／切 六弥太館の段）・五段目（口 鎌倉殿中の段／切 扇ヶ谷平山陣所の段）、という構成である。

公演記録によると、本公演では、平成二十二年十月～十一月国立文楽劇場での「陣門の段／須磨浦の段／組討の段／熊谷桜の段／熊谷陣屋の段」が直近の公演であり、半通しと言ってよい。平成十三年（二〇〇一）五月国立劇場小劇場では、前記と同様の「組打の段」の次に「脇ヶ浜宝引の段」を加えている。平成十二年（二〇〇〇）一月国立文楽劇場では、さらに「陣門の段」の前に「堀川御所の段／敦盛出陣の段」、「組打の段」の次に「林住家の段／弥陀六内の段」を加えており、四段目を欠くが、通しと言ってよい直近の公演である。昭和五十九年（一九八四）一月朝日座では、さらに最後に「六弥太館の段」が加わり、近年では最も完全な形での通しである。

一の谷の合戦（寿永三年（一一八四）二月七日）の前月^{三三}から、平家滅亡後しばらく経った頃（元暦二年（一一八五）？）までを描く。時期区分で言うと第五期から第六期にあたる。

『二谷嫩軍記』におけるパロディーの眼目を一言で言うと、「一の谷の合戦で熊谷次郎直実に首を落とされた敦盛は、直実の息子小次郎直家による身代わりであった」というものである。一の谷の合戦で源氏方の武将熊谷は、我が子小次郎と同じ年頃の平家の大将に出会い、いったんは逃がそうとするが、やむなく首を斬る。後に若武者の正体は平経盛（清盛の異母弟）の子息無官大夫敦盛であると知れ、無常を感じた熊谷は出家の志が強くなる。以上のエピソードを元ネタとして、実は敦盛は後白河法皇の胤であり^{三四}、官位を受けては臣下の身分が確定してしまうところ、まさかの時には皇位を継ぐためにも無官であったとした上で、敦盛を助けよとの義経の命を受けた熊谷が、我が子小次郎を身

代わりに立てたのであったと種明かしをするパロディーが三段目切で描かれる。なお、『平家物語』では熊谷親子と先陣争いを演じた平山武者所季重が、『二谷嫩軍記』では端敵^{はがたき}として脚色されている。

それに比べて上演頻度が低く、筆者は実見していないのだが、もう一つ重要なパロディーとして、「一の谷の合戦で岡部の六弥太^{ろくやた}三五忠純が薩摩守忠度を討ち取った際に功のあった従者は実は平家方で返り討ちを狙っていたところ、間違つて忠度の腕を斬ってしまったのであった」というものがある。源平合戦終結後成立した勅撰和歌集『千載集』に「読人知らず」として歌が載せられた忠度が、一の谷の合戦で六弥太と対戦し、一度は優勢に立ったが六弥太の従者に右腕を斬られ、今はこれまでと念仏を唱えるうち六弥太に首を討たれる。以上のエピソードを元ネタとして、六弥太は実は『千載集』への入選を忠度に伝える使者を義経に命じられたとのパロディーが大序で描かれ、使者の役目を終えた後、戦場での再会を約して別れたとのパロディーが二段目切で描かれ、六弥太の旗持ちとして六弥太の窮地を救つて忠度の腕を斬った太五平は実は元来平家方で、返り討ちをするつもりで六弥太の家来になったが誤つて忠度の方の腕を斬ってしまったと種明かしをするパロディーが四段目切で描かれる。

五段目では、平家滅亡後、頼朝と義経の離反を企む佞人として平時忠と平山が脚色され、六弥太が平山の首を刎ねた後、義経が時忠を殺そうとするところ、出家した熊谷蓮生坊が時忠を預かり、頼朝・義経は取り戻した三種の神器を守護して都に上り、大団円となる。

四 おわりに

以上、現代の観客にとつての時代物の分かりにくさの一因として「時代物はパロディーであるが、現代人は元ネタを知らない」との仮説を提唱した上で、『平家物語』等を元ネタとする文楽作品について、パロディーとしての見どころを解説するという形で仮説の検証を試みた。本稿の内容そのものは専門家にとつ

て周知の事柄ばかりであろうが、このような形でまとめられた本稿を読んだ非専門家の観客に「なるほどそういう話だったのか、やっと分かった」と言ってもらえたとしたら、前記の仮説は裏付けられることとなる。少なくとも筆者自身は、本稿を執筆する過程でようやく筋が理解できるようになったものである。

ただし、時代物をパロディーとして楽しむというのはあくまでも楽しみ方の一つに過ぎない。冒頭で述べたように、文楽の楽しみ方にはいろいろある。パロディーとしてではなく、一個の独立した作品として、作品そのものに描かれた人間ドラマを楽しむことも出来よう。いや、それこそが本来のあり方であろう。本稿は、それに加え、「もう一つの楽しみ方」の可能性を探ったものである。

注

* 本稿は、平成二十四年（二〇二二）二月十八日に国立文楽劇場会議室で行われた文楽応援団平成二十四年第一回研修会での学習会における同名の報告をもとに、大幅に加筆したものである。同報告では本稿末尾の年表の元となった表を配布したが、本稿の年表と比べて量的に不十分であるのみならず、少なからぬ誤りを含むものであった。それにもかかわらず、温かいお言葉を掛けていただいた参加者にこの場を借りてお礼を申し上げたい。

一 「文楽」の用語は、「明治五年（一八七二）一月、現在の大阪市西区にある松嶋千代崎の地に人形浄瑠璃の専用劇場として「文楽座」が新築開場した」（日本芸術文化振興会国立劇場調査養成部（編）二〇〇九、四百三十二頁、ルビはママ、引用文中におけるルビの扱いについて以下同様）ことを根拠とし、さらにその由来は、「淡路出身で、自ら浄瑠璃を語り、号を文楽軒と称していた」植村（正井）與兵衛が十九世紀初頭に大阪に現れた（同、三百十五頁）ことに遡るとされる。本来はあくまでも人形浄瑠璃の一派に過ぎないが、近年、人形浄瑠璃の代名詞として「文楽」を用いる。

二 なお、「主だった役名や引書（参考文献）、さらには参照すべき浄瑠璃作品などが手軽に引ける便覧『タネ本』（服部（編）一九七四、一頁）として、「狂言作者たちの要求に応じて作成され、各時代の作者たちの間で珍重されて伝わったのが、すなわち『世界綱目』であ」（同）る。

三 伊藤（二〇一一）によると、「最新の研究成果では、義太夫節の浄瑠璃作品（浄瑠璃の全段を取めた丸本の残る作品）は全体で大体六百三十作とされている」（x頁）ところ、「筆者の数えたところ、この間『山本注・近松門左衛門が竹本義太夫のために『出世景清』を書き下ろした貞享二年以降、寛政年間あたりまで』に初演された源平物は約百十作」（同）であり、同書末尾の「附録『平家物語』関連浄瑠璃一覧」には、読本浄瑠璃・写本五作を含め、九十七作が挙げられている。また、『世界綱目』の「平家物語」の世界の「義太夫」として十三作が挙げられており、関連して「保元物語」には五作、「平治物語」には五作、「頼政」には四作、「伊豆日記」には十作、「木曾」には七作、「義経記」には三十作（朱書のある「堀川浪の鼓」を除く）、「源平軍並に頼朝治世」には三十五作、それぞれの世界の「義太夫」として挙げられている。

四 伊藤（二〇一一）は、「主に平家物語に取材している浄瑠璃作品の検討では一応そのおおもとを平家物語に置き、必要に応じて謡曲・舞曲・古浄瑠璃等の先行芸能・文芸作品を補助スケールとして採用する、という態度をとることを基本的な前提として出発できるのとは異なり、義経物に対する検討においては、義経が実際に活躍していた時代から遠く隔たった室町時代に成立した『義経記』だけをア・プリオリに特別視することはできない」（六十二頁）とするが、筆者の力量不足から、本稿では『平家物語』『義経記』『平治物語』の翻刻書のみを見出し、それ以外については文楽作品の翻刻書の注釈や研究書を参照するに留めた。

五 後鳥羽天皇は寿永三年四月十六日、元暦に改元するが、安徳天皇を擁する平家方は引き続き寿永を使用した。

- 六 弁慶の生年は『義経記』本文からは明らかでなく、史実でも不詳とされるが、御伽草子『弁慶物語』及び幸若舞曲『高館』の内容から計算すると仁平二年（一一五二）となる（佐谷二〇〇二、二百四十五～二百四十六頁）。
- 七 義経と弁慶とが主従の契りを結んだ年は『義経記』本文からは明らかでないが、『弁慶物語』の内容から計算すると安元三年または治承元年（一一七七）となる（安元三年八月四日に治承に改元したところ、『弁慶物語』によると主従の契りを結んだのは八月十七日）（佐谷二〇〇二、二百四十六頁）。
- 八 底本の解説には「享保四年（一七一八）（四百五十八頁）とあったが、明らかに誤植である。
- 九 『義経記』では、「天狗の住家となりて」^{てんぐ}「参籠する人なかりけり」^{さんろう}（三十一頁）というありさまの、鞍馬山の奥の貴船神社で武芸の稽古をしたとあるが、目を避けるためであって、天狗に武芸の稽古をつけてもらったとは書かれていない。「義経が天狗に兵法を学んだとする表現が見えるのは、古活字本『平治物語』や謡曲『鞍馬天狗』、幸若舞曲『未来記』『烏帽子折』等のテキストである」（佐谷二〇〇二、二百五十頁）。
- 一〇 あくまで筆者が参照した底本においてであって、諸本によってはあるかも知れない。
- 一一 正確に言うと、特に平家に忠勤を尽くしているわけではなく、何も考えず遊興にうつつを抜かしている（と世間に見せかけている）。
- 一二 ただし、牛若丸の方が人斬りをしていたとの設定は、室町中期頃写と推定される『武蔵坊弁慶物語絵巻』や御伽草紙『天狗の内裏』にも見られ（佐谷二〇〇二、二百四十八頁）、この点に関する『鬼一法眼三略巻』のパロディーとしての独自性は無い。独自性は、義経（牛若丸）と弁慶のみならず、鬼次郎・鬼三太・皆鶴姫・広盛といった主要登場人物が一堂に会し、弁慶が母の敵の広盛の首を落とすといった趣向に見られる。
- 一三 昭和六十三年五月国立劇場小劇場では「侍従太郎館の段」との段名が見えるが、明らかに「弁慶上使の段」のことである。
- 一四 史実及び『義経記』では十月十七日であるが、『平家物語』では九月三十日に描かれる。なお、八月十四日に元暦から文治に改元。
- 一五 本稿における浄瑠璃の底本からの引用にあたっては、文字譜は省略し、振り仮名は（ ）（ ）等の記号を省略し、捨て仮名は本文と同じ大きさで記し、漢字は通行の字体に改めることとした。
- 一六 必ずしも『平家物語』では昌俊、『義経記』では正尊というわけではなく、市古（校注・訳）（一九九四b）の注釈によると、そもそも同書の底本（通称高野本、覚一別本）には「正俊」とあったところ、屋代本・延慶本等によって「昌俊」としたとある（四百四十八頁）。
- 一七 底本の解説には「元文五年」^{一七四}（十六頁）とあったが、明らかに誤植である。
- 一八 そもそも駒若が朝敵の子であるという予備知識が観客になければ、特に問題はないのかも知れない。駒若を狙うのは梶原景時とその家来番場の忠太であるが、彼らに狙われているというだけで駒若に同情が集まると考えることも出来よう。
- 一九 『義経千本桜』の底本では明けて文治二年（一一八六）一月に描かれ、さらに現行の舞台では桜の季節として上演される。
- 二〇 高橋（二〇〇九、三五～三九頁）は、維盛は重盛の長子ではあるが、母の門地を考えると第四子の清経が重盛の嫡子であるとする。
- 二一 『源平盛衰記』にはさらに、安徳天皇は清盛の三男宗盛とその同母妹建礼門院徳子との近親相姦の子であるとの説が述べられている（伊藤二〇一一、百六十五～百六十六頁）。
- 二二 平治二年一月十日に永暦に改元。
- 二三 伊藤（二〇一一）には、三十九の「利用説話」の一覧表がある（百八十三～百八十六頁）。
- 二四 これは『平治物語』に見られるエピソードであり、『平治物語』では長田

庄司忠致・先生景致親子のところ、『源平布引滝』では架空の人名「長田の太郎末宗」にあたる。

二五 これは『平家物語』には見られないエピソードであり、『平治物語』では難波三郎経房、『源平盛衰記』では難波六郎経俊によるエピソードがあるところ（鶴見一九五九、四十五、三三九十一頁）、『源平布引滝』では架空の人名「難波ノ六郎常俊」にあたる。

二六 『源平布引滝』では架空の人名「成忠」にあたるが、娘が重盛の妻であるとの設定は成親の父家成に基づく。その上で、「成り忠成り親親子の者共。元ト首切ツて捨させよ」（『源平布引滝』五十九頁）と清盛は命じており、成忠には成親という子がいたことになる。ただし、成親は舞台には登場しない。なお、伊藤（二〇一一）には、「新大納言成親の娘が重盛の妻」（百八十三頁）とあるが、「成親の妹」の誤りである。

二七 『平家物語』では木曾中三兼遠（四百四十二頁）。

二八 ただし、篠原合戦で手塚に討たれることが、実は義仲誕生の日に遡つての以前からの実盛と手塚との間の約束であったということは、予備知識を持つ観客に対して「元ネタに対するパロディー」としての効果を有すると言えよう。

二九 史実においては、高橋（二〇〇九）によると、行綱は「平家都落ち後、木曾義仲に従っていたが、法住寺殿での合戦前から離れ、義経入京後は摂津武士を率いて」おり、『平家物語』では義経の功績とされる「鴨越の逆落とし」も「功は多田行綱をリーダーとする摂津武士たちに帰さなければならぬ」とのことである（百六十八頁）。

三〇 『平家物語』に由来を持つ人名ではあるが、義賢の娘としては架空の人物である。

三一 なお、五段目では義仲の家臣木曾四天王の由来が語られるが、本来、義仲の家臣の木曾四天王とは樋口次郎兼光・今井四郎兼平兄弟と根井小弥太行親・楯六郎親忠親子を指すところ、『源平布引滝』では楯六郎を伊達の三郎とし、

樋口を外して手塚を入れる。

三一 「平家物語の実盛は自分の死後を慮って息子二人を維盛の遺児につけるなど、平家の将来を気にかけて行動をとっており、平家に属しながら源氏を利するような態度は決して見せていない」（伊藤二〇一一、百九十八頁）。

三二 一の谷の合戦は二月七日だが、『一谷嫩軍記』は合戦の日を三月七日とした上で、二月から物語が始まる。

三三 『一谷嫩軍記』序切では、「先祖平の忠盛へ。白河院より下されし祇園女御の例に任せ」（『一谷嫩軍記』補注三百八十九頁）と、清盛も白河院の胤であったとの『平家物語』におけるエピソードが引かれている。高橋（二〇〇九）は、「清盛の母を祇園女御もしくは彼女の妹とする伝承があるが、前者は事実ではないし、後者は根拠薄弱である」としながらも、「清盛の母は白河法皇身辺の女性で、法皇の子を身ごもったまま忠盛に下賜されたらしい」とする（八頁）。

三四 底本の『平家物語②』には「六野太」とあるが、注釈によると流布本では「六弥太」とのことなので（二百二十七頁）、本来であれば本稿全体にわたって流布本を底本とすべきところ、ここだけ特に『一谷嫩軍記』の表記に合わせて「六弥太」とする。

年表

年号	平家物語	義経記	平家女護島	鬼一法眼三略卷	御所桜堀川夜討	ひらかな盛衰記	義経千本桜	源平布引滝	一谷嫩軍記
仁平二年 一一五二	清盛が安芸守の頃(一一四六)一五(一)熊野参りの清盛の船に鱧が踊り入る。清盛、熊野権現のご利益との修験者の勧めに心じて料理。このために清盛は出世(一)鱧。	後の弁慶、熊野の別当弁せうの妻の腹の中に十八か月いて生まれる(三)熊野の別当乱行の事。		その後 広盛、熊野の別当弁真(故人)の妻を殺害。腹の中に七年間いた男子(後の鬼若)が生まれる(序切)。					
久寿元年 一一五四	久寿元年 久寿に改元。10・28	弁せうの妹、子を与えられ、鬼若と名付ける(三) 弁慶生まるる事。		同日 後の鬼若の姉 柳の前(後のお京)の乳母飛鳥、後の鬼若の乳母に(序切)。					
久寿二年 一一五五	7・23 近衛天皇、十七歳で崩御。								
7・24 後白河天皇(鳥羽天皇第四皇子)、二十九歳で践祚。									
8・16 木曾先生義賢(義朝の異母弟)、源義平(義朝の長男)に討たれる。その時二歳の義仲を、母が信濃の木曾中三兼遠に託す(以上、六)廻文。									
保元元年 一一五六	4・27 保元に改元。7・2 鳥羽法皇、五十四歳で崩御。7 保元の乱。乱後 清盛、勲功により、安芸守から播磨守に(一)鱧。			熊野の別当弁真、清盛に敵対し切腹。清盛、弁真の懐妊中の妻の子が男子なら殺				義賢が討たれたのは、平治の乱(一一五九・一二)の翌年、平家によって。義賢の御台所葵御前、義仲を身籠りながら逃れる(以上、二切)。	
								出生後 齋藤市郎実盛、葬に、若君駒王丸(後の義仲)を信州諏訪の権頭兼任に預けるよう伝え、九郎助・小よし夫婦に供を命じる(三切)。	

	保元二年 一一五七	保元三年 一一五八	平治元年 一一五九		平治二年 一一六〇
	六歳の鬼若、比叡山に預けられる(三弁慶生まるる事)。	8・11 後白河天皇、十六歳の二条天皇(後白河天皇第一子)に譲位。	4・20 平治に改元。	12 平治の乱(一鱸)。	1・3 義朝、長田庄司忠致・先生景致の騙し討ちにあい、臣下の鎌田兵衛正清(忠致の婿)とともに討たれる(平治物語下 義朝内海下向の事付けたり忠致心替りの事)。 1・7? 長田親子、義朝・正清の首を持参して上京。忠致は志岐守、景致は左衛門尉に。忠致がさらなる恩賞を要求すると、清盛、恩賞を取り消す(平治物語下 長田六波羅に馳せ参る事付けたり尾張に逃げ下る事)。
				12・27 義朝、京の戦に敗れ、東国に落ちていく。その後、嫡子惠源太郎に生け捕られ、六条河原で斬られる。次男中宮大夫進朝長、山法師大矢の注記に弓で射られ、美濃の国の青墓で死ぬ(以上、一 義朝都落の事)。	
	すよう命じる(大序)。 鬼若、書写山の性慶に預けられる(二切)。			清盛、播州書写山青松院性慶・播磨大掾平広盛らを伴い熊野詣に行く途中、平治の乱の知らせ。わざと都を離れて反乱をおびき出したもの(大序)。	
					鎌田兵衛政清には、鎌田隼人清次という弟がおおり、兄から勘当を受けていたが、源氏に帰参するため、長女のお筆を義仲に、次女の千鳥を梶原家に、それぞれ奉公(二口)。
				平治の乱(一一五九・一二)↓平治に改元(一一五九・四)↓二条天皇即位(一二五八)(序切)。	平治の乱(一一五九・一二)の後、長田の太郎末宗(景致にあたる)、清盛の使として、義朝の首と源氏の白旗を後白河院に献上。大納言成忠(中納言藤原家成にあたる)、義朝の首をあつて、義朝の首をあつて葬れと娘園生(家成の娘経子にあたる)の夫重盛に言い聞かせよとの院の言葉を伝える(大序)。

年 号	平治二年 一一六〇	永曆元年 一一六〇	平治二年 一一六〇	平治二年 一一六〇	平治二年 一一六〇	平治二年 一一六〇	平治二年 一一六〇	平治二年 一一六〇	平治二年 一一六〇
平家物語	その後 文覚、獄舎の前の苔の下に埋もれていた義朝の髑髏を牢番人に頼んで貰うける(五福原院宣)。	元。1・10 永曆に改	(史実では一一五九・12・27) 清盛、平治の乱の勲功で正三位に(一) 鱸。						
義経記									
平家女護島									
鬼一法眼三略卷									
御所桜堀川夜討									
ひらかな盛衰記									
義経千本桜									
源平布引滝	同日 後白河院、木曾先生義賢に、多田の蔵人行綱を探せと言い、源氏の白旗を与える。義賢、まだ安芸守であることを理由に清盛の昇殿を制止。清盛、白旗の返還を要求。成忠、白旗は焼き捨てたと答える。清盛、院を直接詮議しようとする階段から転げ落ち、報復に院を鳥羽離宮に押し込めると宣言(六序)。	義朝の首は結局、六波羅の獄門に(二切)。	2半ば 難波六郎常俊(平治物語では難波三郎経房、源平盛衰記では難波六郎経俊)、清盛の霊夢を受け、重盛の命により、布引の滝壺に飛び込む。狩人(実は行綱)、重盛を射損じる。難波、平家滅亡との弁天の言葉を伝え、雷に打たれて死ぬ(と見えたが、実は重盛の命で院の身代わりを務めることに)(序中)。						
一谷嫩軍記	弥兵衛宗清、頼朝に加え、母常盤とともに伏見の里で凍えていた三歳の義経ら								

承安元年 一一七一			嘉応元年 一一六九	弟)、「此二門にあらざらむ人は、皆人非人なるべし」(以上、一禿髮)。
元。4・21 承安に改		鬼若十八歳以降、鬼若、自ら剃髮し、昔の比叡山の悪僧西塔の武蔵坊の名を継ぐとともに、父の弁せうと師のくわん慶に因み弁慶と改名、比叡山を下りる(三)弁慶山門を出る事)。	7・16 (史実では6・17) 後白河院、出家(二 殿下乗台)。	4・8 嘉応に改
		鬼若十三歳の誕生日自ら剃髮し、「法師と見せて武をかくす」に因み武蔵坊、父の弁真と師の性慶に因み弁慶と改名、書写山を下りる(二切)。		
承安の初め頃(手塚太郎が十六七歳、義仲が明けて十一歳)兼任の子息次郎・四郎と、根の井の小弥太の子息三郎(楯六郎親忠のこと)、駒王丸の家来に。兼任、「今より主従中よし」と駒王丸の言葉と父の名義賢に因み駒王丸を義仲と命名。				
				一の谷の合戦の年(一一八四)の十五年前大内勤めの佐竹次郎(後の熊谷次郎直実)、相模と不義禁獄させよとの後白河法皇の院宣に対し、藤の局のとりなしで東に逃れ、小次郎を出産。藤の局は後白河法皇の胤を宿したまま経盛(清盛の異母弟)に嫁し、敦盛を出産(三切)。

年号	平家物語	義経記	平家女護島	鬼一法眼三略卷	御所桜堀川夜討	ひらかな盛衰記	義経千本桜	源平布引滝	一谷嫩軍記
承安三年 一一七三	徳子(清盛の娘)、高倉天皇に入内(二鹿谷)。	秋の頃 十五歳の牛若、少進坊(鎌田三郎正近)から自らの出自を知らされる。(一)少進坊の事。							
承安四年 一一七四		2・2 十六歳の遮那王、吉次宗高に従い鞍馬山を出る(一の事)。 2・6 鞍馬を出て三日目に熱田の宮に着き、三日滞在した遮那王、元服し、左馬の九郎義経と改名(二) 遮那王殿元服の事)。		鬼一(さいいち)法眼は鬼次郎・鬼三太と三兄弟。鬼一、秘かに源氏に心を寄せる。牛若丸は六韜三略の「虎の巻」を手に入れるため、虎蔵と名を変え、智恵内と名を変えた鬼三太と共に鬼一の館に。皆鶴姫(鬼一の娘)、牛若を慕う(以上、三切)。					
安元元年 一一七五		7・28 安元に改元。 12・27 法眼、妹婿で弟子のたうかい坊湛海に義経を討たせようとするが、湛海が義経に討たれる(二) 義経鬼一法眼が所へ御出の事)。		鬼一の弟子の笠原湛海、皆鶴姫に横恋慕。牛若丸に切られる。鬼一、牛若丸に渡ることを期待して「虎の巻」を皆鶴姫に与				の三郎と合わせて木曾四天王と予言(一本来の四天王は、手塚太郎は入らず、根の井の小弥太行親が入る(以上、五)。	

<p>11・12 中宮徳子、後の安徳天皇を出産(三 御産)。皇女誕生の際の習わしの後、皇子誕生の際の習わしをやり直す(三 公卿揃)。</p>		<p>9・20頃 丹左衛門尉基康、鬼界が島に到着。俊寛を残して成経と康頼を召還(三 赦文・足摺)。</p>	
	<p>その後、夏、重盛が病に伏し(二七九)俊寛以外の赦免船が戻る途中 清盛の妾の常盤、色仕掛けで源氏の味方を募る。腰元の笛竹は実は牛若。重盛の家来の弥平兵衛宗清、源氏の白旗を常盤・牛若に。宗清は牛若に自分を討てと言いが、常盤は討たせない。雛鶴として常盤に仕える松枝、父の宗清を突く。常盤・牛若・雛鶴、落ち延びる(三切)。</p>	<p>その後、成経、千鳥と契り、俊寛の養女にして自分の代わりに千鳥を赦免船に乗せる(二切)。</p>	<p>その後、春 東屋、清盛の側室になることを拒み、能登守教経(教盛の子)の情けにより自害。教経が清盛に諫言するところ俊寛の召使いに王、乱入(序切)。その後 丹左衛門尉基康と瀬尾太郎兼康が丹波少将成経と平判官康頼の赦免に向かうところ、教経、病床の重盛の意を体して俊寛の赦免状。そこへ中宮平産の知らせ(二切)。</p>
<p>安徳天皇は実は女(二切)。</p>			

<p>(七 竹生鳥語)。</p>	<p>5・11 俱梨迦羅峠の合戦(七 俱梨迦羅落)。</p>	<p>5・21 篠原合戦(七 篠原合戦)。 齋藤別当実盛、手塚太郎金刺光盛に討たれる。七十歳を過ぎ髪が黒いのは、樋口次郎兼光によると、かねてからの実盛の意向(七 実盛)。</p>	<p>7・25 平家一門、安徳天皇と三種の神器と共に都落ち(七 主上都落)。 維盛(重盛の長男)、妻経子(成親の娘)・嫡子六代・娘を都に置く(七 維盛都落)。 薩摩守忠度(忠盛の六男)、藤原俊成(千載集の撰者)に歌を託す(七 忠度都落)。</p>	<p>7・28 義仲、後白河法皇を奉じて入京。法皇、義仲・行家に平家追討の命令(八 山門御幸)。</p>	<p>法皇、天皇と三種の神器を都に返すよう、西国へ院宣を下すも、平家は従わず(八 山門御幸)。</p>	<p>8・10 義仲に朝日の将軍の院宣(八 名虎)。</p>	<p>8・20 後鳥羽天皇、四歳で践祚。安徳天皇と並立(八 名虎)。 閏10・1 水島合戦(八 水島合戦)。 その後 瀬尾太郎兼康と嫡子小太郎宗康、義仲の家来の今井四郎兼平に破られ討死(八 瀬尾最期)。</p>	<p>られる。実盛、白旗を握っている小まんの腕を切り落とす(三中)。</p>	<p>実盛が手塚太郎金刺光盛に篠原で討たれたのは、平治の乱の翌年(一一八〇)の秋の半ば、実盛が光盛に約束したことであり、見間違えないように髪を黒く染めておくとした(三切)。</p>	<p>一一八四・二半ば、一の谷の合戦の前、菊の前の(俊成の娘で忠度の恋人)、忠度の歌を千載集に加えたことと俊成の意を伝える。義経、読人知らずとして千載集に入れることにし、岡部六弥太を忠度への使者に(大序)。</p>	<p>平治の乱の翌年(一一八〇)の秋の半ば、瀬尾十郎兼氏、孫の太郎吉(手塚太郎光盛)に手柄を立てさせるため、わざと太郎吉に討たれる。小まんは実は瀬尾の子(三切)。</p>
------------------	--------------------------------	---	---	--	---	--------------------------------	---	--	--	---	---

年 号	平家物語	義経記	平家女護島	鬼一法眼三略卷	御所桜堀川夜討	ひらかな盛衰記	義経千本桜	源平布引滝	一谷嫩軍記
寿永三年 一一八四	11・19 法住寺合戦 (八) 鼓判官・法住寺合戦。					1・20 過ぎ 宇治川の戦い。佐々木四郎高綱、先陣争いで梶原平三景時、過ちで切腹となる。ところ、佐々木の四郎高綱のとりなしで救われる。景時が義経に遺恨を抱いたのはこの時より(六序)。	1・20 義経が宇治に向かう途中、射手(いとこ)の明神で、梶原平三景時、過ちで切腹となる。ところ、佐々木の四郎高綱のとりなしで救われる。景時が義経に遺恨を抱いたのはこの時より(六序)。		
同日 義仲の召使山吹、病のため都に残る(九) 木曾最期。	同日 巴はしばらく義仲と行動を共にするが、逃げるよう義仲に言われ、最後に御田の八郎師重の首をねじきって、東国の方に落ちる。手塚太郎、討死(九) 木					義仲と山吹御前との間に三歳の長男駒若。山吹と駒若、腰元お筆に伴われ、桂の里の鎌田隼人清次(お筆の父)のもとへ落ちていく(序中)。	その後 桂の里を梶原の郎等番場の忠太に襲われ、山吹と駒若とお筆と隼人、立ち退く(二二中)。		
同日 義仲はしばらく義仲と行動を共にするが、逃げるよう義仲に言われ、最後に御田の八郎師重の首をねじきって、東国の方に落ちる。手塚太郎、討死(九) 木						義仲とはぐれた巴、和田の義盛に生け捕られる。義経、義盛の求めに応じ、懐妊の巴を義盛に預け、男子が生まれたら和田の家を相続させよと命じる。後の朝日			
						その後 源太景季、宇治川の戦いで先陣争いに敗れて父に切腹を命じられる。恋人千鳥(お筆の妹)に横恋慕する弟平次景高に辱められた後、父を切腹から救った佐々木に先陣を譲ったと真意を明かす。母延寿、助命のため勘当(二一切)。			
						その後 源太景季、宇治川の戦いで先陣争いに敗れて父に切腹を命じられる。恋人千鳥(お筆の妹)に横恋慕する弟平次景高に辱められた後、父を切腹から救った佐々木に先陣を譲ったと真意を明かす。母延寿、助命のため勘当(二一切)。			

<p>曾最期)。</p>	<p>1・21(史実では1・20)粟津合戦。義仲、粟津の深田にはまつたところを三浦の石田の次郎為久に討たれる。今井四郎兼平、自害(九 木曾最期)。</p>	<p>その後 樋口次郎兼光(兼平の兄)、兎玉党に降伏。 1・25 樋口次郎、義経らの助命嘆願にかかわらず、後白河院の命令で斬られる(以上、九 樋口被討罰)。</p>	<p>1・29 後白河院、平家追討に向かう範頼と義経に、三種の神器を取り戻すよう命じる(九 三草勢揃)。</p>	
<p>奈の三郎義秀はこのことである(序切)。</p>	<p>木曾の郎等井上次郎、一両年以前より梶原景時に通じ、兼平の首を取ったと称して恩賞を要求(序切)。</p>	<p>樋口の次郎兼光、義仲の討死を知り、仇討のため、二年前夫に死なれたおよし(権四郎の娘)に嫁入り、松右衛門の名を継ぐ。隼人・植松・山吹の死の翌月、樋口が嫁入りしてから約一年後、一の谷の合戦の前、樋口、逆櫓にことよせて梶原に近づくも、計略は見破られる。畠山の庄司重忠、権四郎の訴人により、駒若をあくまで植松として助けて預かり、樋口を生けて捕る(以上、三切)。</p>	<p>義仲の入京(一一八三・七・28)の後、後白河法皇、義仲に、三種の神器を取り戻すよう命じる(序切)。</p>	<p>一の谷の合戦の前日、延寿、無間の鐘になぞらえて手水鉢を打とうとする傾城梅が枝(千鳥)に、景季の鏡兜を請け出す三百両を与える(四中)。</p>
	<p>義仲が粟津の深田にはまって討たれたのは、平治の乱の翌年(二六〇)の早夏、義仲の安産祈願の絵馬が粟津の深田に落ちたからである(二中)。</p>			
<p>2半ば、一の谷の合戦の前、義経、熊谷次郎直実に弁慶の筆の二枝を伐ば二指を剪べし」との高札を与え、若木の桜の守護を命じる(大序)。</p>				<p>その後、平経盛(清盛の異母弟)、我が子の無官大夫敦盛に、実父は後白河法皇であり、まさかの時は皇位を継ぐべく無官であったと打ち明け、法皇の御殿に移るよう進言。敦盛、父に代わって一の谷の陣所で討死の決意(序切)。</p>

年号 寿永三年 一一八四	平家物語 2・6夜から翌朝にかけて。熊谷二郎(次郎)直実・十六歳(小次郎)直家と平山武者所季重、一谷で先陣争い(九一二乃懸)。	2・7 一の谷の合戦。生田の森の先陣の河原兄弟の戦死の報の後、梶原勢、出陣。梶原平次景高、先駆けを急ぐ。平三景時(父)・源太景季(兄)・三郎景家(弟)、後に続く。景高、景季を救出(九二度乃懸)。	同日 義経、鶴越の坂落し。平家は八島に逃れる(九坂落)。	同日 一の谷の西の手の大將軍忠度、岡部の六野太忠純と一騎打ち。六野太の童、忠度の右腕を切り落とす。忠度、今はこれまでと念仏を唱え、六野太に討たれる。敵に結び付けられた文で忠度と知れる(九忠度最期)。	同日 景季、生田森の副將軍の重衡(清盛の五男)の馬を射る。景季より先に庄の四郎高家、重衡を生け捕る(九重衡生捕)。	同日 直実、平家の若い大將軍をいったんは逃がそうとするが、後ろから土肥・梶原が五十騎ほど来る
	義経記					
	平家女護島					
	鬼一法眼三略卷					
	御所桜堀川夜討					
	ひらかな盛衰記					翌日 景時、生田の森で奮戦する景季の勘当を赦免。これが梶原が二度の駆けである。畠山の次郎重忠、樋口の次郎義経の前に連行。義経、後白河法皇の意向を汲んで樋口を釈放、権四郎に槌松(実は駒若)を預ける。樋口、お筆・梅が枝に番場の忠太を討たせ、景高の首を捻切り、自害(五)。
	義経千本桜					
	源平布引滝					
	一谷嫩軍記					3・6夜から翌朝にかけて。熊谷小次郎直家、一の谷の西の木戸陣門で、平山に先陣を譲られる。直実、小次郎(実は敦盛)を救出。平山、敦盛(実は小次郎)に打ち寄せられ、逃げる(一二)。
						3・7 直実、十六歳の敦盛(実は小次郎)をいったんは逃がそうとするが、平山に見とがめられ、首を

<p>3・15 維盛、八島を脱出し、与三兵衛重景・石堂丸・武里を召し連れて、高野山に(十)横笛。その後 維盛、重景・石堂丸とともに出家(十) 維盛出家)。</p> <p>その後 熊野を参詣(十) 熊野参詣)。</p> <p>3・28 維盛、重景・石堂丸とともに、那智の沖で入水(十) 維盛入水)。</p> <p>武里も入水しようとしたが、滝口入道に止められ、八島の資盛(維盛の異母弟)に維盛の手紙を渡す(十三) 平氏)。</p>	<p>のを見て、首を斬る(九) 敦盛最期)。</p> <p>その後 直実が首を斬ったのは、平経盛の子息で十七歳の敦盛、持参していた笛の名は小枝と知れる。直実、出家の志が強くなる(九) 敦盛最期)。</p> <p>一一九二 直実、出家して法力坊蓮生と号す。</p>
<p>吉野下市村の釣瓶鮪やの弥助、熊野浦で維盛に出会い、連れ帰って我が名を譲り、自らは弥左衛門と改名(三) 切)。</p> <p>一一八五・8・1 主馬の小金吾武里、若葉の内侍と六代に、維盛は実は高野山で存命との噂を伝え、二人と共に高野山に向かう(序中)。</p> <p>その後 吉野上市村近くで小金吾、藤原の朝方の家来猪熊大之進を殺して若葉の内侍と六代を逃がした後、息絶える(三) 中)。</p> <p>同夜 弥助(実は維盛)、妻子と再会。梶原平藏景時、頼朝の意向として維盛に出家を促す。維盛、高野山に向かう(三) 切)。</p>	<p>打つ(二) 中)。</p> <p>その後 白毫の弥陀六(実は弥平兵衛宗清)、若衆(実は敦盛)の依頼で石塔を立てる。弥陀六の娘小雪(実は重盛の娘)、若衆に思いを打ち明ける。若衆、形見として青葉の笛を与える(三) 口)。</p> <p>同日 藤の局、青葉の笛を手に入れる(三) 中)。</p> <p>その後 義経、敦盛の首実検。熊谷が我が子小次郎を身代わりにしたことが判明。弥陀六、注進に駆け出す。梶原平次景高を殺す。義経、弥陀六を弥平兵衛宗清と見抜き、娘小雪へと敦盛を与える。直実、出家して蓮生と自ら改名(三) 切)。</p>

年号	平家物語	義経記	平家女護島	鬼一法眼三略卷	御所桜堀川夜討	ひらかな盛衰記	義経千本桜	源平布引滝	一谷嫩軍記	
寿永三年 一一八四	4・16 後鳥羽天皇、元暦に改元。安德天皇を擁する平家方は引き続き寿永を使用。 5・16 頼盛(清盛の異母弟)、鎌倉に到着。頼朝、弥平兵衛宗清が同行していないのを残念がる(十三日平氏)。 7末 維盛の北方、夫の出家と入水を知る(十三日平氏)。 その後、このことを頼朝も知り、重盛からの恩を思えば子息の維盛の命も助けたのに、まして出家とあればと述懐(十藤戸)。 7・28 後鳥羽天皇、三種の神器なしで即位(十藤戸)。 8・6 九郎冠者義経、左衛門尉に任じられ、検非違使尉として九郎判官と呼ばれる(十藤戸)。 9 義経、川越太郎重頼の娘を妻とする。 1・10 義経に平家追討の院宣(十一逆槽)。 2・16 義経、景時と逆槽論争(十一逆槽)。									
寿永四年 元暦二年 一一八五	2・18 八島(屋島)の合戦。				義経と頼朝が不和になる年(二八五)の前年の春、千人切は義経によると知った伊勢の三郎義盛、父の敵と思いついて義経のもとを去る(二切)。	一の谷の合戦(二一八四・二・七)の前、景時に逆槽を教えたのは樋口の次郎兼光(三切)。	弥左衛門やいがみの権太の尽力にかかわらず、もともと頼朝は維盛を助けて出家させるつもりであった(三切)。			
							二一八六・一 狐忠信、八島の戦いで			

年号 元暦二年 一一八五	平家物語	義経記	平家女護島	鬼一法眼三略卷	御所桜堀川夜討	ひらかな盛衰記	義経千本桜	源平布引滝	一谷嫩軍記	
4・25 内侍所と神璽、京に戻る。宝剣は失われる。神璽は海上から片岡太郎経春が取り上げたとの噂(十一内侍所都入)。	5・1 建礼門院、出家(灌頂女院出家)。	義経、平大納言時忠の娘をはじめ、都では二十四人のもとに通う(四義経都落の事)。			平の時忠が娘の君を、義経に嫁がせたのは、油断させて義経を討ち取るため(序切)。 時忠、平家一味の連判状を義経から盗み出して梶原の家来の番場の忠太に渡そうとするも、昌俊に奪われてしまう(序切口)。 時忠が能登国に流された後、伊勢の三郎義盛、昌俊から受け取った連判状を義経に渡して帰参。連判状には梶原親子三人の名前も。義経、不問に付して連判状を焼き捨てる(三二口)。		義経に初音の鼓を与え、頼朝追討を命じる。義経、鼓は拝領するが打たないと、言つて拝領(以上、大序)。		平家滅亡後、頼朝、時忠がひそかに持っていた三種の神器の残る一つ十握の御剣を奪い返して時忠を縛り、六弥太に平山の討伐を命じる(五口)。 その後、六弥太、番場の忠太と平山を殺す。義経が時忠を殺そうとすると、出家した熊谷蓮生坊が止め、時忠を預かる。 その後、頼朝・義経、神器を守護して上京(以上、五切)。	二八四・2、一の谷の合戦の前、平家追討の命を受けて入洛した義経、平家方にある三種の神器を取り戻すために平大納言時忠の娘の君の婚に。時忠、神璽と神鏡を持参(大序)。 その後、一の谷の合戦の前、時忠、梶原平次・平山武者所未重とともに、卿の君を義経から引き離して梶原に娶わせ、平経盛のもとへ養女にやつた敦盛の許嫁玉織姫を取り返して平山に娶わせようと密議。これを義経に聞かれた卿の君、自害(序中)。
5・24 義経、宗盛・清宗親子を連行して鎌倉に到着するが、頼朝、景時の讒言により義経を腰越へ追い返す(十一腰越)。	朝、義経に不審(十一文之沙汰)。	頼朝、腰越にいる義経を討てと川越太郎重頼に命じる。重頼、娘が義経の妻であることを理由に拒否(四義経平家の討手に上り給う事)。								

年号 文治元年 一一八五	平家物語	義経記	平家女護島	鬼一法眼三略卷	御所桜堀川夜討	ひらかな盛衰記	義経千本桜	源平布引滝	一谷嫩軍記
	9・29 義経を騙し討ちするよう頼朝に命じられた土佐房昌俊、京到着。 9・30 (史実では10・17) 弁慶に連行された昌俊、義経に起請文。 その夜 昌俊、義経を夜討ち。磯禪師の娘静が送った召使いの働きで義経は事前に察知(平家物語で静が登場するのはこのくだりのみ)。伊勢三郎義盛・佐藤四郎兵衛忠信(嗣信の弟)・江田源三・熊井太郎・弁慶、迎え撃つ(以上、十二土佐房被斬)。	10・17 弁慶に連行された正尊、義経に起請文。 同夜 正尊、義経を夜討ち。静が送った召使いは捕まってしまう(以上、四土佐坊義経の討手に上る事)。			その後 卿の君の母、景高に襲われたところを磯の前司の子で静の兄藤弥太に助けられるが、景高と藤弥太は実はグル(四中)。 その後 静が義経の正妻となり、卿の君は腰元信夫に身をやつしている。それに気づいた藤弥太が鎌倉へ注進しようとするのを母磯の前司(夫の名を継ぐ)、刺す。藤弥太、善心に戻り、番場の忠太の夜討ちの計画を静に伝える。番場の忠太、土佐坊昌俊の名を騙り夜討ち(四切)。		土佐坊正尊と海野の太郎行永、申し開きも聞かぬうちに義経を夜討ち。静、義経の命を受け、弁慶を制止に。弁慶、無分別に海野を討ち取る。義経、初音の鼓を持ち、駿河ノ次郎と亀井の六郎重清を供に、館を立ち退く(序切)。		
	10・1 昌俊、命が惜しければ助けるとの義経の言葉を断り、六条河原で斬られる(十二土佐房被斬)。	10・18 正尊、処置を義経に任された弁慶の命で六条河原で駿河次郎に斬られる(四土佐坊義経の討手に上る事)。			同夜 本物の昌俊は約束通り義盛に討たれる(四切)。 翌日 弁慶、昌俊の名を騙った番場の忠太に正尊と名を付けて首を打つ(五口)。		同日 弁慶、土佐坊の首を投げて義経の行方を占う(序切)。		
	11・2 後白河院、義経の要求に応じて鎮西(九州)を与えらるるの院序下文(十二判官都落)。	11・1 後白河院、後で近国の源氏に大物の浦で討たせることとして、義経の要求に応じて四国九国を与えらるるの宣旨(四土佐坊義経都落の事)。					土佐坊の夜討ち(一一八五・9・30)の直後 義経・亀井・駿河の主従三人、都を出て多武の峰を目指す。静と弁慶、伏見稲荷で追い付く。義経、静に初音の鼓を与える。佐藤四郎兵衛忠信(実は狐)、土佐坊		
	11・3 義経ら五百余騎、都を出る(十二判官都落)。	11・3 義経ら一万五千余騎、静を連れて都を出る(四土佐坊義経都落の事)。							

<p>義経、吉野の奥にこもる(十二判官都落)。</p>	<p>その後 高雄(神護寺)の文覚、六代の助命に奔走(十二六代)。</p>	<p>11 北条四郎時政、北嵯峨の菖蒲谷に母・妹とともに潜んでいた六代を捕える(十二六代)。</p>	<p>11・8 (史実では11・12) 後白河法皇、頼朝の申し状によって、義経追討の院宣(十二判官都落)。</p>	<p>(史実では11・6) 義経、大物の浦から船に乗って九州に向かうが、激しい西風のため住吉の浦に打ち上げられる。都から連れて行った女房たち十余人を捨て置くと、住吉の神官が憐れんで都へ送る。西風は平家の怨霊のせい(以上、十二判官都落)。</p>	<p>平大納言時忠の娘、静など十一人の女性と同船中、大物の浦で暴風雨(四義経都落の事)。</p>
<p>12・16 義経、吉野山中で別れるとき、静に初音の鼓を与える。元は中国のもので、法住寺の長老↓平正盛(清盛の祖</p>	<p>12・15 義経ら、吉野山に籠る(四住吉大物二か所合戦の事)。</p>			<p>静を残して愛妾たちを陸に上げ、家来を送り届ける(以上、四住吉大物二か所合戦の事)。</p>	
<p>一八六・1 静と狐忠信、吉野にいと噂の義経を訪ねていく(四道行)。</p>	<p>義経、東光坊の弟子であった吉野山の河連法眼に匿われている(四切)。</p>	<p>いがみの権太の忠義の後、維盛、若葉の内侍に、高雄の文覚に六代のことを頼むよう言う(三切)。</p>	<p>二八五・8・1 朝方の家来の猪熊大之進、北嵯峨の草庵に潜んでいた若葉の内侍(六代の母)と六代を捕えに来るも、逃げられる(序中)。</p>	<p>?・28 義経一行の逗留先の大物の浦の渡海屋銀平は実は知盛、妻おりうは実は典侍の局(重衡の北の方のこと)、娘お安は実は安徳天皇(二中)。</p>	<p>の郎等逸見の藤太から静を救う。義経、姓名と鎧を忠信に譲り、都に留まれと静を預ける。義経、弁慶の提案により、豊前の尾形(豊後の緒方三郎惟義のこと)を頼りに、船に乗ろうと尼が崎大物の浦を指す(以上、二口)。</p>

<p>文治二年 一一八六</p>	<p>義経、北国を経て、奥州へ下る(十二)判官都落。</p>	<p>義経、奈良法師に攻められ、都へ帰る(十二)判官都落。</p>	<p>義経、吉野法師に攻められ、奈良へ逃げ落(十二)判官都落。</p>	<p>忠信、横川の禪師覚範を一騎打ちで破る。その後、義経の身代わりをしていたが実は忠信であると正体を明かし、自害に見せかけて脱出(五)忠信吉野山の合戦の事。</p>	<p>12・24 義経、奈良の観修坊の得業のもとへ(五)吉野法師判官を追ひかけ奉る事。</p>	<p>義経、奈良法師の但馬阿闍梨に襲われ、奈良を出る(六)判官南都へ忍び御出ある事。</p>	<p>正月末 義経が都に忍び隠れているとの噂。義経、奥州へ下ることに(七)判官北国落の事。</p>	<p>義経一行、弁慶の機転で関守たちの疑いを晴らし、愛発の関を通過(七)三の口の関通り給ふ事。</p>	<p>義経一行、安宅の渡しを過ぎ、加賀の国富樫に。弁慶、富樫介より東大寺への勸進を受ける(七)平泉寺御見物の事。</p>	<p>安宅関で弁慶が義経を打ったのは、かつて(一一七)、乳母の飛鳥が主の鬼若(後の弁慶)のためを思つて折檻したから(二)切。</p>	<p>三初 如意の渡で渡し守に怪しまれ、弁慶、義経を打つ(七)如意の渡にて義経を弁慶打ち奉る事。</p>	<p>狐忠信、教経と忠信との一騎打ちに加勢。河越太郎重頼、頼朝追討の院宣を捏造した朝方を連れてくる。教経、平家追討の院宣も朝方の仕事と首を落とす。忠信、兄の敵の教経の首を打つ。義経は奥州に。安徳天皇は母のもとで出家するたため小原の里に(五)。</p>	<p>四、『平家物語』等に題材を得たと思われる文楽作品における事件を、底本における段を(一)内に明記しつつ、対応する行に記述した。口・中・切等は底本及び『浄瑠璃作品要説』に従った。</p>	<p>五、事件は一対一に対応するものではなく、かつ、文楽作品においては、『平家物語』等と異なる時系列に脚色されることが多々あることに注意。</p>	<p>六、日付の決定にあたっては、作品中に明記されている場合のほか、登場人物の年齢(教元年)や著名な事件からの経過等により推測した。そのため、矛盾が多々あることに注意。</p>	<p>七、「同日」「その後」等は、同一列(横方向)における直前の行(右)を基準とするものである。</p>	<p>八、人名は、底本の表記を尊重しつつ、適宜分かりやすく表記した。</p>	<p>凡例</p>	<p>一、『平家物語』『義経記』における、文楽作品に題材を与えていると思われる事件及び重要な事件について、出典となる章段を(一)内に明記しつつ記述した。</p>
----------------------	--------------------------------	-----------------------------------	-------------------------------------	--	---	--	---	---	--	--	--	---	--	---	--	--	--	-----------	--

参考文献一覧

- 市古貞次(校注・訳)(一九九四a)『平家物語①』(新編日本古典文学全集45)小学館、一九九四年六月。
- 市古貞次(校注・訳)(一九九四b)『平家物語②』(新編日本古典文学全集46)小学館、一九九四年八月。
- 伊藤りさ(二〇一一)『人形浄瑠璃のドラマツルギー―近松以降の浄瑠璃作者と平家物語―』(早稲田大学学術叢書19)早稲田大学出版部、二〇一一年九月。
- 乙葉弘(校注)(一九六〇)『浄瑠璃集上』(日本古典文学大系51)岩波書店、一九六〇年六月。
- 梶原正昭(校注・訳)(二〇〇〇)『義経記』(新編日本古典文学全集62)小学館、二〇〇〇年一月。
- 義太夫節正本刊行会(編)(二〇〇七)『鬼一法眼三略卷』(義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集成⑨)玉川大学出版部、二〇〇七年五月。
- 神津武男(二〇〇九)『浄瑠璃本史研究 近松・義太夫から昭和の文楽まで』八木書店、二〇〇九年二月。
- 国立劇場芸能調査室(編)(一九八六)『浄瑠璃作品要説』(4)竹田出雲篇』国立劇場、一九八六年二月。
- 国立劇場芸能調査室(編)(一九八八)『浄瑠璃作品要説』(5)西沢一風・並木宗輔篇』国立劇場、一九八八年三月。
- 佐谷眞木人(二〇〇二)『平家物語から浄瑠璃へ―敦盛説話の変容』慶應義塾大学出版会、二〇〇二年十月。
- 高橋昌明(二〇〇九)『平家の群像 物語から史実へ』(岩波新書)岩波書店、二〇〇九年十月。
- 角田一郎・内山美樹子(校注)(一九九二)『竹田出雲並木宗輔浄瑠璃集』(新日本古典文学大系93)岩波書店、一九九二年三月。
- 鶴見誠(校注)(一九五九)『浄瑠璃集下』(日本古典文学大系52)岩波書店、一九五九年六月。
- 鳥越文蔵ほか(校注・訳)(二〇〇〇)『近松門左衛門集③』(新編日本古典文学全集76)小学館、二〇〇〇年十月。
- 日本芸術文化振興会国立劇場調査養成部(編)(二〇〇八)『日本の伝統芸能講座 音楽』淡交社、二〇〇八年三月。
- 日本芸術文化振興会国立劇場調査養成部(編)(二〇〇九)『日本の伝統芸能講座 舞踊・演劇』淡交社、二〇〇九年二月。
- 服部幸雄(編)(一九七四)『狂言作者資料集(一)―『世界綱目』『芝居年中行事』―』(歌舞伎の文献6)、国立劇場調査養成部・芸能調査室、一九七四年三月。
- 福田豊彦・関幸彦(編)(二〇〇六)『源平合戦事典』吉川弘文館、二〇〇六年十二月。
- 宮本瑞夫(校訂代表)(一九九五)『竹本座浄瑠璃集』(二)『叢書江戸文庫38』国書刊行会、一九九五年十二月。
- 柳瀬喜代志ほか(校注・訳)(二〇〇二)『将門記 陸奥話記 保元物語 平治物語』(新編日本古典文学全集41)小学館、二〇〇二年二月。
- 祐田善雄(校注)(一九六五)『文楽浄瑠璃集』(日本古典文学大系99)岩波書店、一九六五年四月。